



4月6日 桜 (三嶋大社)



4月6日 入学式 (西小学校)



4月3日 桜まつり (楽寿園)



4月2日 三島みどりまつり (長伏公園)

DT
In the city own
フォトマイタウン



3月20日 池田柵線・三島駅北口線開通式 (長泉町中土狩)



4月2日 桜 (国立遺伝学研究所)



4月2日 文教テニスコートのリニューアルオープン記念イベント (文教町)



4月1日 富士山南東消防本部開所式 (南田町)



4月7日 障がい者応援大使任命式 (市長応接室)



4月8日 夜桜 (三嶋大社)



4月11日 みしまびとによる映画完成報告 (市長応接室)

官軍御用日記 ～三島宿維新活動の記録～

過しました。その行列はとても目を引くもので、日記には三島宿近隣を通過したり宿泊した大名・公家・下級武士などの名前や動向などが詳細に記されています。

日記では、新政府軍の行為に対し、近隣の関所や番所を奪ったという見方をしており、「乗取」という表現が使われています。箱根の関所でも同様で、文中には「薩州様ニテ乗取」とあり、官軍に制圧されたとしています。また三島宿では、新政府軍が通過したときには十五歳～六十歳の人々が人足として駆り出されるなど負担を強いられました。

慶応四年五月、旧幕臣を中心とした部隊である彰義隊が東京上野で戦闘を始めます。沼津でその一報を受けた遊撃隊が箱根を通過するため、三島宿に立ち寄ったときの宿泊所や彼らの動向が詳細に記されています。また、遊撃隊の大將林忠崇は脱藩した藩主であり、そのうえ新政府軍に抵抗しているにもかかわらず、著者は「様」を付けて敬意を払っています。小田原藩の藩論が佐幕か勤皇か二転三転したため、遊撃隊と衝突する結果となり、新政府軍も交え箱根で戦いが起こりました。湯本や畑宿の

集落は焼き払われ、付近には川のように血が流れ箱根宿内にも死人が溢れるなど、箱根戦争について生々しく表現されています。

慶応四年九月、元号が明治に変わります。その約一カ月前の八月十三日、徳川家達が三島宿の樋口本陣に宿泊しています。駿河・遠江などが家達の領地となったため、江戸から駿府へ向かうこととなり、途中の三島に宿泊しました。このとき既に新政府軍に従う姿勢を示していた葦山代官江川英武が三島宿にご機嫌伺いに訪問しています。翌日には、三島宿の間屋・年寄が宿場の西端にある千貫樋まで見送りに来ています。朝廷に政権が移った後であっても徳川家に対し敬意を払っていたことがわかります。

また、郷土資料館発行『三島市郷土資料館研究報告8』にて『官軍御用日記』の全文翻刻を掲載しています。ぜひご活用ください。

▲『官軍御用日記』
箱根戦争について記載した部分



三島の村名⑥

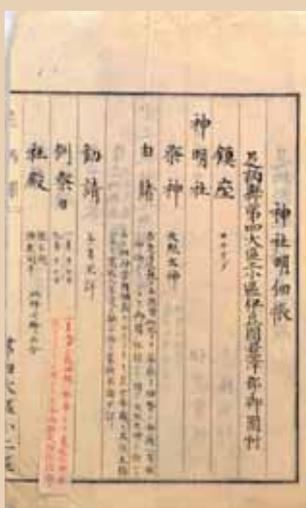
御園

(中郷地区)

御園は、狩野川と大場川の合流地点の北側に位置しています。「御園」とは本来、天皇や神様に供するための果実・野菜類を作る畑地を指す呼称です。そうした役割を担った土地の多くで「御園」の呼称が地名として定着しました。

三島市御園については、同地に鎮座する神明宮の台帳(明治七年(一八七四)成立)に「古老の伝える説」として、昔この地が伊勢神宮へ野菜をたてまつる神領であったために「御園」の名が付けられた、と記されています。この伊勢神宮領であったという説については、はっきりとしたことがよくわかっていません。さかのぼって十四世紀成立の裁判資料では、三嶋大社の社領として「御園」の名を確認できます。

なお神明宮の社叢は、市の天然記念物に指定されていて、境内を歩くと樹齢三〇〇年を越える楠木や犬楨に出会えます。



▲『神社明細帳』
(明治7年成立、館蔵)

『官軍御用日記』は書かれました。この時期、東海道では明治天皇や、新政府軍のほか徳川慶喜に代わり徳川家の相続を許されて駿府へ向かう家達(亀之助)などが通

幕末、慶応四年一月から始まる戊辰戦争で薩摩・長州などの藩が倒幕のため江戸へ進軍する中、東海道沿いでは小田原以西すべての藩が官軍に従う意思を示します。しかし、抗戦を続ける旧幕府勢力もあり、箱根では遊撃隊という旧幕府勢力のひとつと新政府軍との戦いがありました。戊辰戦争はその後も東北地方などで続きますが、同年七月、天皇の江戸への東京行幸と江戸の東京改称が宣言されます。このような時代背景の中で

また、郷土資料館発行『三島市郷土資料館研究報告8』にて『官軍御用日記』の全文翻刻を掲載しています。ぜひご活用ください。